Akita University

秋田大学教育学部研究紀要　教育科学部門　52　pp. 127～133.　1997

# ダウン症児の自己意識の発達に関する研究
## ―連絡帳の分析を通して―

今　野　和　夫

# A Study on the Development of Self Consciousness in a Child with Down's Syndrome through the Analysis of Communication Notebooks between his Mother and Teacher

Kazuo KONNO

The purpose of this study is to investigate the development of self consciousness in a child with Down's syndrome. For this purpose, communication notebooks between his mother and teacher were analyzed. His mother had recorded utterances which he produced during four years, namely, from the first grade to the fourth grade of a normal elementary school. Those utterances were useful for analyzing self consciousness. I found six aspects of self consciousness, namely, recollection, confirmation of the present state, intention, plan, view of future, combination of those. The confirmation of the present state was subcategorized into five sorts. There were clear developmental changes in recollection and plan. The results suggest that the potentiality of development of self consciousness in children with Down's syndrome should not be ignored.

本研究の目的は，一人のダウン症児の自己意識の発達を解明することである。そのために，彼の母親と教師間での連絡帳が分析された。4年間，すなわち通常小学校の1年生から4年生までの間に彼が発した言葉を，母親は連絡帳に記録していた。それらの言葉が，自己意識の発達を明らかにするための手がかりとなった。筆者は，自己意識について6つの側面，すなわち回顧，現状規定，意向，行動予定・見通し，将来展望，これらの組み合わせを捉えることができた。現状規定は，4つの種類に下位分類できた。回顧と行動予定・見通しについては，明瞭な発達的変化を確認できた。これらの結果は，ダウン症児における自己意識の発達可能性を無視してはならないことを示唆している。

## Ⅰ．はじめに

人は，一人のときも相手がいるときも，自己の過去や現在，また未来について，意識することがある。例えば，「僕は昨日，先生にほめられた。」「僕はへとへとだ。」「中学生になったら僕はテニスクラブへ入ろう。」というように。自分に対して注がれるこのような意識が自己意識である。この自己意識には，刹那的な内容の他に，「僕の趣味はサッカーだ。」とか「僕は算数が苦手だ。」というように，自己について築いている安定したイメージ（自己概念）が反映されたものがある。

自己意識は，パーソナリティの中核をなすものであり，自己の存在感や主体性の維持にとり欠かせないものである。またそれは，自己の存在感や主体性，立場といったものを他者から無視されたり軽視されたりしないために，重要なものである。換言すると，自己意識を含む発話は，自分の主体性や独自性を他者に暗に伝えているとも言えよう。

ノーマライゼーションが叫ばれ，自己決定力を備えた主体的で能動的なパーソナリティーを育むことが知的障害児の教育や福祉の実践課題となっている。Sands & Doll(1996)[1]は，メタ認知力や目標設定力，社会的問題解決力（他者を効果的に援用して問題解決を図ること）などとともに自己意識もまた，自己決定力の重要な構成要素であるとしている。そして，それらの発達に関する基礎的研究を推進させることや，依存性を助長しないような障害児教育カリキュラムを作ることの必要性を指摘している。

一方，自己意識の発達に関する研究は，非障害児と知的障害児のどちらにおいても遅れている。一般に2歳頃には，鏡やテレビの中の自己像が「自分」とわかる。ま

Akita University



た，あたかもそれが自力で動いているかのように人形を扱えるようになる。すなわち，他者とは異なる，他者から独立した存在としての自己が確立する。ちなみに，ダウン症児のような知的障害児では，自己の確立が非障害児よりも遅れることが明らかにされている[2)3)]。

その後，自己についての一定のイメージを確立して「私」について幾通りも自由に記述できるようになるまでの間に自己意識がどのように発達するかについては，十分な究明が進んでいない。田島(1991)[4)]は，この間(すなわち幼児期から学童中期頃まで）における自己意識の発達に関する研究を進める上では，乳児期の自己意識研究の主要な方法である観察法や実験法と児童期以降のそれの主要な方法である質問紙法（例えば20答法）とを接近させることや，両者の関連性を吟味することが必要としている。Sperry & Smiley (1995)[5)]は，「発話はそれを通して自己を見ることのできる窓である」，「発話には自己が反映されている」との前提に基づき，幼児や障害児の自己や他者に関する意識の初期発達段階を明らかにするために，遊びや食事などの自然な生活場面で親しい人を相手に子どもが発することばに着目している。Toomey & Adams (1995)[6)]はこの方法により「I show you」とか「I did it!」といった発話を抽出し，5歳から8歳の自閉症児が，なにかのふりをすることはできなくても，他者と関連させて自己意識を発達させつつあることを明らかにしている。

さて，筆者はかつて，ダウン症の知的障害児を次男としてもつ母親から，小学校入学後の4年間にクラス担任と交わされた連絡帳を見せていただく機会があった。その中には，母親との日常の会話中に子どもが発したことばが，母親により数多く書きとどめられていた。そしてそれらの中には，例えば「僕ひとりで行ける。」というように，「僕」という代名詞を主語として含むもの（自己叙述的な発話 self-descriptive utterances）もいくつか認められた。本研究ではそのような発話をもらさず抽出し，その分析を通して小学校入学後の4年間における一人のダウン症児の自己意識の発達を明らかにしたい。このことは，ダウン症児を含む知的障害児の自己意識に関する発達的研究の進展への一助ともなろう。

## II．方　　法

### 1．対象児（本児）について

1983年（昭和58年）の8月22日に2,500グラムで出生(正常分娩)。トリソミー型のダウン症であることが生後4カ月時に判明。一歳ころまでは消化不良や肺炎がくり返し生じる。しかしその後は比較的元気に育っている。心臓に軽い疾患が認められているが，手術を要するほどではなく，健康を配慮して日ごろの運動量を押さえるというようなことはこれまでしていない。小学校に入学してからも，何かに夢中になっていたり，歯の治療などで精神的に緊張したりする場面で大便をもらしてしまうことがあった(小学4年生ころまで)。このことには，ダウン症による筋肉の低緊張が関係していると思われる。

本児は第2子であり，他に5歳上の兄と両親がある。父親の転勤に伴い，3歳時に出生地の秋田市から福島市へ転居し，さらに4歳7カ月時に仙台市へと転居している。母親は，本児の発達と幸せには，幼児期から地域の中で障害のない友達と豊富な関わりをもち続けることが欠かせないと考えており，小学校入学前の2年間の幼稚園も，小学校入学後も通常のクラスの中に本児を入れている。

本児の小学校入学後の5月から，母親は自宅を子ども文庫として週一回開放し，本児の友達や近所の子どもたち，またその親たちが気軽に，しかも楽しみにして訪れられるような雰囲気作りに配慮している。母親も父親も，絵本の読み聞かせ，昔話，わらべ歌などを通して本児と楽しいひとときを過ごす時間を大切にしており，それらに対する本児の興味や知識は同じ年齢の一般の子どもたちを越えている。友だちや祖父母にお話しを聞かせること（ストーリー・テリング）もあった。小学生のころは，ソフトボールやサッカーなどの町内子ども会の活動にも，積極的に参加している。

筆者は，発達検査（新版K式発達検査）と親子遊びの観察，及びそれに基づく話し合いを，生後4カ月から2歳6カ月までの期間，ほぼ月一回の頻度で母親と重ねている。

話し合いの中で筆者は，本児の豊かな生活や発達にとって，また本児の発達を理解する手がかりとして，初期のごっこ遊びが非常に大切であるということを強調した。母親はそのことをよく理解し，筆者が定期的に関わっていたときも，父親の転勤に伴い他県へ転居してからも，ごっこ遊びの言わば栄養となる経験（例えば，食事の用意などの家事を見せたり，それに参加させる。絵本を読んであげる機会を作る。）を豊富に与えてくれている。また，手作りの寝具や手作り絵本など，ごっこ遊びが生じやすい材料をたくさん作ってくれている。

幼児期の発達についてみると，1歳で座位完成（30分以上一人ですわる)。1歳10カ月に一人立ちが可能となり，1歳11カ月に一人歩きを始める。2歳5カ月時の新版K式発達検査による発達指数は68，発達年齢は姿勢・運動領域が616日，認知・適応領域が603日，言語・社会領域が581日。2歳5カ月の時点で，物を差し出すときに「ハイ」，「ホア（ホラ)」といった発声をしている。3

Akita University



歳頃から言語表出面の発達が進み，4歳半頃に3語発話（例えば「ママ，ミズ，チョーダイ」）が出現。その後構文及び統語能力は急激に発達する。

反面，数概念の把握は難しいものがあり，3年生の後半に初めて，5以上の数について数えから量概念への転化（例えば，「イチ，ニ，サン・・シチ，シチニン人だ」）や序数としての認識（例：「イチ，ニ・・・ゴ，ゴ個め」）が可能となる。

自己意識の発達について見ると，2歳5カ月頃にすでに自己と他者の違いを明瞭に意識しての象徴的行為が豊かに認められる。すなわち，例えば，『スプーンでカップからすくって飲むふりをし，そのカップからテーブル上の別のカップに注ぐふりをする。そのカップを，そばにいる母親に「ハイ」と差し出す。』というような，自分と人に関連させての複数事物の関連づけ的使用が認められる。3歳後半に自分の物であることを主張して「コクノ（ぼくの）」と言い，写真の中の自分を「コク（ぼく）」と正しく指さしている。また，他児が登り棒に登るのを見て「ボクモ」と言っている。さらに4歳過ぎには，靴下をはくのを母親が手伝おうとすると，「ボク，ボク，ボク」と言って一人でやろうとしている。4歳3カ月の時に，発音は不明瞭だが「アキキアキキ」と自分の姓名を言えるようになり，またトイレや歯磨きの際とかパジャマを着る際に「ジブン（自分で）」という語を使うようになる。

このように本児は，他者とは異なる独立した存在として，また姓名や力量のような属性を持つ存在として，小学校入学前に自己を意識できるようになっている。

### 2. 自己意識の分類

非障害児の自己意識の発達を明らかにするために従来よく用いられているものとして，「20答法」がある。これは，「私」について20通り自由に記述させるものであるが，中学生・高校生・大学生を対象に「20答法」を実施した梶田（1980）[7]は，彼らの自己意識の構成要素が以下の6種の基本カテゴリーに区分できると指摘している。

・自己の現状についての規定と感情
（例えば，「・・をしている。」「・・が好きである。」
・他者からどのように見られ評価されているかについてのイメージ
（例えば，「・・と思われている。」）
・自己の可能性についての予測ないし確信
（例えば，「・・が得意である。」）
・自己の過去の経験の記憶
（例えば，「・・をした。」）
・自己の未来についての想定
（例えば，「・・するつもりである。」）
・自己のあり方や行動に関する当為，志向もしくは理想
（例えば，「・・したい。」）

本児の小学1年生から4年生までの4年間の連絡帳に母親が記した本児の発話から，「ぼく」や「おれ」といった人称代名詞が含まれているものをすべて抜き出した。そして，梶田による上述の6種類のカテゴリーを参考にして，それらの発話に含まれた自己意識の内容を分析・分類した。

## III. 結果と考察

母親が記した本児の小学校入学後の4年間の発話から，自己意識について以下の6種類の内容を捉えることができた。

A．回顧（自己の過去の行動や気持ちを思いだす。）
B．現状規定（自己の現在について規定的に意識する。）
C．意向（自己の意向を意識する。）
D．行動予定・見通し（自己の今後の行動計画を意識する。）
E．将来展望（自己の将来を意識する。）
F．組み合わせ（BとCの組み合わせ。）

以下，それぞれの内容とその発達について，具体的に見ていくことにする。

### A．回顧

回顧として特徴づけられる自己意識が含まれると考えられた発話には，次のようなものがあった。

〈1年〉
・僕ね，先生におしりペンペンされたんだよ。
（7/6：7月6日の連絡帳に記載の意味。以下同様）
・僕，A先生におこられたんだ。(9/8)
・僕ね，途中でうんちがしたくなって，がまんできなくてしちゃったの。(10/4)
・僕が何もしないのに，○○ちゃんが（僕に）・・した。(2/21)
・おかあさん，僕我慢できなかったんだ。(2/23)
〈2年〉
・僕ね，先生に怒られたんだ。ふざけてね，ああやって，こうやって・・。(7/16)
・僕，K先生と仲良くなったんだ。(10/19)
〈3年〉
・○○君と△△君と僕と一緒にお弁当を食べたよ。(遠足の報告) (4/22)
・僕も（ソフトボールの）試合に出たかったのに。(7/13)
・僕なんにもしていないのにじゅんや君が怒ったんだよ。僕絶対なにもしていないのに。落ち着いて，っ

Akita University



て言ったのに。僕結局泣いてしまったんだ。(下校時の会話) (9/5)

〈4年〉

・おれ，ホットケーキ食べたんだ。Y先生と食べたんだ。Y先生と仲良くなったんだ！(夕方ふと思い出して) (4/13)

・おれ友達に言われたんだ，顔を洗わなかっただろうって。(7/2)

・マラソンもしたよ。僕はがんばって走ったよ。(9/8)

・おれ6周走ったんだよ。(10/27)

・俺のチームは勝ったけど，ボールは俺に回ってこないんだ。(サッカーの報告) (12/21)

・おれ久しぶりに体育をしたんだ。バスケットと縄跳び。(2/17)

・俺今日，無理して体育をしたんだ。(3/3)

過去の回顧といっても4年間を通して認められるのはその日の振り返りであり，昨日やそれ以前のことへの振り返りは認められない。自分一人の行動（・・した。）とともに，自他の関係を含む行動（○○に・・された。○○と仲良くなった。○○と一緒に・・した。）や自分の気持ち（例：がまんできなかった。）が，4年間を通して回顧されている。一方4年生ともなると，「がんばって走った (9/8)」とか「無理をして体育をしたんだ (3/3)」というような，気持ちを伴わせた行動の振り返りが可能となっている。

**B．現状規定**

自己の現状の規定，として特徴づけられる自己意識は，さらに以下のように下位分類できると思われた。

イ．可能性についての現状規定

〈1年〉

・僕着替えはいらないの，おもらしをしないんだから。(登校時) (6/27)

・僕だって書けるんだから。(年少の子どもが漢字を書くのを見て) (9/6)

・僕一人で行ける。(登校の途中) (9/29)

・僕，八の字はうまく書けないんだよ。(10/27)

・僕だってきらきらぼしをひけるんだから！ (11/6)

・僕だってできる。(11/26)

・僕一人で行ける。(子ども会のレクリェーションの集合時) (11/26)

〈2年〉

・お母さん，僕一人だけで行けるから来なくてもいいよ。(登校時) (10/31)

・先生，ぐるぐるまきはしないでね，僕だいじょうぶだから。(歯科医にて) (12/9)

〈3年〉

・教えないでよ，僕できるんだから。(日記を書くとき) (5/24)

・僕は言われなくても一人でできるよ！ (歯磨きを指示したとき) (11/13)

・お母さん，これむずかしくって僕できないから教えてね。(リコーダーでのジングルベル演奏) (11/16)

〈4年〉

・ゆっくり話してよ，僕書けないんだから。(日記を書いてるときに話しかけると) (6/2)

・お父さん，何メートル泳げるの？ (「そうだな，100メートルくらいかな。」) すごいね。僕，少ししか泳げないんだ。(7/14)

・おれはちゃんとやっている。(「当番とか係の仕事はちゃんとやっているのかな。」と問われて) (12/16)

自己の可能性への意識が含まれた発話（・・できる。・・できない。）は以上のようなものであるが，すでに1年生のときから自立心 (9/29) や自負心 (9/6) がその意識や発話の基盤に存しているようである。

ロ．成長についての規定

〈1年〉

・そうだよ，僕2年生になるんだから。(一人で下校できたことをほめたとき) (2/4)

・僕もそろそろ2年生だよ。(友達と肩を並べて) (11/1)

以上のように1年生の時に既に，本児は，自己を時間的に静止した存在としてでなく，これからさらに成長していく存在，時間軸上にある存在として，意識している。またそういう存在であることに，自信と期待を抱いてもいるようである。そして2年生からは，以下のように，自分の学年やこれからなっていく学年への意識が，自己の可能性についての肯定的な見方をもたらしている。

ハ．イ＋ロ

〈2年〉

・そうだよ，僕2年生だから強いんだよ。(石段を上りきり「さすがだね・・」と言うと) (5/7)

〈3年〉

・うん，僕は9歳だから強いんだ。(10/22)

〈4年〉

・僕5年生だから一人で待っていられる。(家にて) (6/30)

・5年生なんだから僕はできるよ。(3/23)

ニ．自己の社会的位置づけ

〈4年〉

・(車中で) 2組は楽しいけど，僕は1組の子なんだ。

Akita University



(12/17)

・僕は○○です。K小学校の4年1組です。
(旅行中のバスの中で自己紹介) (4/30)

以上のように，4年生になって初めて，自己を一つの特定集団の一員として意識している。

ホ．感情

自己の現在の感情の規定を含む自己意識であり，3年生，4年生に認められる。

〈3年〉

・僕は眠たくてしかたがないんだよー！（日記を書きながら）(4/11)

〈4年〉

・でも僕は超好きなんだからね。(酔って帰宅の父に母がいやな顔をすると) (1/29)

・○君のような3個入った箸箱を僕もほしいな。(7/17)

また，自己の不安を意識することばも4年時に記されている。

・おれおもらししたらどうしよう。(4/16)

ところで，「僕」という語を冒頭に含まなくても明らかに自己意識を介在させて発せられていると考えられるのが，「照れる」とか，「はずかしい」といった，他者からの目や評価への懸念を含む自己感情の表現である。3年時の連絡帳 (6/25) には，本児はこのごろ照れる，と母親が記している。そして4年生には，以下のような発話が認められる。

・恥ずかしいからやめろ。(マラソンを「お母さん応援するからね」に対して) (11/17)

**C．意向**

「僕は・・したい/したくない。」「僕は・・しよう。」という自分の意向や意欲の表現であり，以下のようなものがある。

〈2年〉

・お母さん，僕疲れても走るからね。(運動会にて) (10/1)

・お母さん，手を握っていてね。そしたらぼくがんばれるから。(歯科医にて) (12/9)

・僕がんばって帰る。(一人だけでおひさま文庫へ) (10/2)

〈3年〉

・僕はやりたくない！　僕は今日休みます。さようなら。(絵の教室について) (5/9)

・母さんは母さんで考えてよ，僕は僕で考えるから。(日記を書くとき) (5/22)

・教えないでよ。僕一人で書くんだから。(作文を書くとき) (6/12)

・パパ，僕がんばって書くから一緒に寝ようね。(日記を書いているとき)。(6/12)

**D．行動予定・見通し**

「僕はこれから・・する。」「・・しよう。」というようなことばで表されている。学年を経るに連れて，明日のこと (3年9/3) とか2，3日後のこと (4年6/24) など時間的により先のことについて意識できるようになっている。また，「・・してから・・する。」(3年6/4，4年1/18)，「・・する前に・・しなくては。」(3年5/30，4年2/24) というように，複数の行為を順序立てて意識できるようになっている。ちなみに母親は3年の連絡帳(5/30)に，「あした，S先生に日記を見せよう。」という本児のことばを書きとどめている。そして，明日のために何かをするという，少し遠い目標がだんだんわかってきた，以前は30分後の目標もわからないときがあったと付記している。

〈1年〉

・僕バスを描くんだ。(9/8)

〈2年〉

・お母さん，僕ははるちかくんの家へ行くんだから帰って。(2/3)

〈3年〉

・僕，試験があるからまだ寝られないんだ。お母さん，先に寝てていいからね。(5/30)

・僕，仕事があるから，まだ寝られなかったんだ。早めに終わるからお母さん先に寝ていてね。(夜一緒に寝ようとしたとき) (2/19)

・僕，おふろに入ったら帰るから。(他家からの電話) (6/4)

・そうだ，(学校に)僕のパズルをもって行くんだ。(9/3)

〈4年〉

・僕，自分の部屋で書くからお母さん来ないでね！(作文帳を書くとき) (5/12)

・まいこちゃんとあつなちゃんとまりえちゃんと，僕と，みんなで養護学校に行くんだよ，土曜日に行くんだ。(6/24)

・僕は一人で寝るから僕の部屋に布団を敷いてくれ。(9/1)

・お父さんと僕は男子用ふとんに寝るから，お母さんは女子用ふとんに寝てね。(11/5)

・僕，これからおふろに入ってシャンプーをして，ドライヤーをしてから，歯磨きをして，それから寝るからね。(1/18)

・僕先にトイレに行くからね。(歯科医にて) (2/24)

**E．将来展望**

〈1年〉

Akita University



・僕，大きくなったらポランの人になりたい。(12/6)

ポランとは，ポランという名の児童書専門店のことであり，上のことばは，大きくなったらその店で働きたいことを意味していると思われる。2/19には,「大きくなったらなにになりたい？」と聞かれて「おひさま文庫になりたい。」と答えている。おひさま文庫とは，母親の友人が家庭を地域の子どもたちに開放して週一回開いている文庫のことである。本児は，大きくなったらこの文庫で何かしたいと意識しているのであろう。こうして，小学1年生の頃から，時間的にかなり先の将来の自分についても，意識をはたらかせている。

**F．組み合わせ：B（ロ）＋C**

〈1年〉

・僕は大きいんだからもう泣かないよ。(5/18)

・僕はもうすぐ二年生だからがんばって歩いて帰る。（登校時）(1/29)

〈2年〉

・僕は二年生だから泣かないよ。(約一年ぶりの歯科医にて)(11/12)

・僕は二年生だから泣かないよ。(歯科医にて)(11/28)

〈4年〉

・先生，ぐるぐる巻きにしないでください。僕もうすぐ5年生だからがんばるから。(歯科医にて)(2/24)

・僕，5年生なんだからやらなくっちゃ。(3/23)

自分の成長についての意識は，がんばるとか我慢するといった意欲や自己統制の増長に結びついていることが示唆されよう。

## Ⅳ．ま　と　め

以上のように，本研究では，母親が連絡帳に書き留めた発話を手がかりとして，小学校入学後の4年間における一人のダウン症児の自己意識の様相を把握することができた。すなわち回顧，現状規定，意向，行動予定・見通し，将来展望，組み合わせである。そのうち現状規定については，自己の可能性についての規定，自己の成長についての規定，これら二つの組み合わせ，自己の社会的位置づけについての規定，自己の感情についての規定に下位分類できた。また，回顧と行動予定については，4年間における発達的な変化も認めることができた。すなわち，回顧は4年間を通じてその日のことに限られていたが，4年生では，自分のした活動とその際の気持ちを一緒に意識できるようになっていた。また行動予定については，学年を重ねるにつれて明日のことやそれ以降のことを，それも単一の行動だけでなく複数の行動をつなげて意識できるようになっていた。

以上の結果は，まず第一に，ダウン症児における自己意識の発達可能性の大きさを示唆している。ダウン症児のパーソナリティに関しては，従来温厚であるとか，模倣がうまい，頑固であるといった画一的・特性論な見方が流布している。これは，自己意識を含むダウン症児の人格及びその個人差に関する研究の発展を大きく妨げていると思われる。今後は，言語表出面で本児よりも遅れている子どもも含む多くのダウン症児や知的障害児を対象として，またとかくうつ病などの精神病理学的側面からのみその人格面が言及されがちな成人のダウン症者や知的障害者をも対象にいれて，彼らの自己意識の発達可能性やそれにかかわる要因を究明する必要があろう。

ちなみに，自己意識を含んだ発話には，「僕は・・したくない。」「僕は・・したい。」というような自己主張的ニュアンスが強いものも多く含まれている。このような発話を頭から大人への反感や抵抗とみなし,「わがままである。」とか「がんこである。」と思う大人は，自己意識や自己決定力の育ちを無意識のうちに制限してしまうであろう。一方，Smiley & Greene (1995)[8]は非障害児について，3歳前における自己や他者についての意識の発達にとり，身ぶりやことばによって発せられる子どもの側からの要求に対して親しい大人（母親）がどのように対応するかがきわめて重要である，と指摘している。そして例えば，子どもの側からの要求の発信―子どもが低年齢の場合や障害児の場合，一度では明瞭に相手側に気づかれない場合が多い―に対する母親からの確認（例「Do you want me to fix it？」）は，自分にとっての他者の意味や他者の意向の意識化とともに,「自分は今相手にあることを求めているんだ。」といった自己の意識化にも寄与していると述べている。会話中に立て続けに一方的に話しかけることで子どもの立場・主導権を奪わないこと，子どもが理解しやすく自分の考えをもてるような話題を投げかけること,「おかあさんはできないな。」などと人称代名詞を含んだ発話を多くすることなども，自己意識の発達に寄与するものと思われる。

本児の両親は，本児が2歳になる前から，遊びや絵本の読みきかせをとおした本児との楽しいかかわりを大切にしていた。また先に述べたように，小学校入学後は自分の家を文庫として地域に開放したため，小学校の4年間を同じ学校の友達だけでなく地域の幼児や大人とも豊富なかかわりを持ちながら本児は生活してこれたように思う。これらのことは本児の自己意識の発達に大きく影響していると思うが,今後はより厳密な視点で,すなわち例えば母親など親しい人との会話を含む相互交渉場面の観察を通して,ダウン症児など知的に障害を持つ子どもたちの自己意識の形成や発達に対して他者の応答や働きかけがどのように影響しているのか，明らかにする必要があ

Akita University



ろう。

本研究の結果は，第二に，ダウン症児などの知的障害児における自己意識のありようや発達の理解にとり，親しい人との自然な会話の中で発せられた自分に関する言及を含むことばを捕らえ，それを継続的に記録することが役立つことを示唆する。ちなみに，会話中に発せられた他者に関する発話も捕らえ，記録することで，自己意識のみならず他者意識のありようや発達についても情報を得ることができよう。本研究の対象児の場合，連絡帳に母親が記した他者に関する発話は，自己に関するそれよりもかなり少なかった。それでも，小学校の最初の4年間に回顧（誰が・・した。誰が・・だった。），現状規定（誰は・・だ。誰は・・している。），期待（誰は・・するかな。）といった内容の他者意識が確認できる。また，回顧については，「先生が歌った。」というような他者の行動についての回顧に加えて，3年生になると「先生はさびしそうだった。」というような他者の状態や心情に関する回顧も認められる。現状規定については，「先生はかっこいいよ。」とか「お兄ちゃんは上手だよ。（ドッジボールについて）」というような評価的内容が1年生の時から認められる。この規定には観察的内容とでも特徴づけられるものがあり，4年時では，2年時（例「先生ときどきこわい目になることもあるよ。」）や3年時（例：「おかあさんたら寝てばかりいる。」）には見られなかった内容，すなわち第3者や自己と関連づけた他者意識が認められる。具体例としては，「お兄ちゃん，ひかるげんじみたいだね。」とか「あのお兄さん，僕と似ているね。」（区役所でダウン症の青年とすれ違ったとき）というものである。最後に期待は，3年時に認められる（「S先生，これ見て笑うかな。」（家で日記を書いているとき））。

今後は，会話を抽出して分析する方法が，例えば1語文や2語文レベルにとどまるなど言語表出面での遅れが大きな子どもの自己意識や他者意識を捉える上でどれほど有効なのかを，この方法の限界や危険性（例えば，身ぶりなどの非言語的手段による自己意識の発現の見逃し）をも見据えつつ，明らかにする必要がある。

## 文　献


1) Sands, D. & Doll, B.: Fostering Self-Determination is a Developmental Task. The Journal of Special Education. 30 (1): 58-76, 1996

2) Lewis, M. & Brooks-Gunn, J.: Age and Handicapped Group Differences in Infants' Visual Attention, Child Development. 55: 858-868, 1984

3) Loveland, K. Behavior of Young Children with Down Syndrome before the Mirror: Finding Things Reflected. Child Development. 58: 928-936, 1987

4) 田島信元：自己意識（社会性の発達心理学，繁多　進他編．福村出版：136-148, 1991）

5) Sperry, L. & Smiley, P. (Eds): Exploring Young Children's Concepts of Self and Other Through Conversation. Jossey-Bass, Inc., Publishers. 1995

6) Toomey, J. & Adams, L.: Naturalistic Observation of Children with Autism: Evidence for Intersubjectivity. In Sperry, L. & Smiley, P. (Eds): Exploring Young Children's Concepts of Self and Other Through Conversation. Jossey-Bass, Inc., Publishers.: 75-89, 1995

7) 梶田叡一：自己意識の心理学　東京大学出版会：P 85-86, 1980

8) Smiley, P. & Greene, J.: Learning About Self and Other During Requests. In In Sperry, L. & Smiley, P. (Eds): Exploring Young Children's Concepts of Self and Other Through Conversation. Jossey-Bass, Inc., Publishers.: 7-19, 1995